

平成28年7月29日

「南海トラフ想定震源域のひずみの分布状態が初めて明らかに」 (平成28年5月24日付プレスリリース)に関するQ&A

これまでに寄せられたお問合せの中で特に多かった質問について、以下のとおり回答します。

Q1. 南海トラフ想定震源域の外側に“ひずみ”分布が描かれていますが、今回の海上保安庁の解析結果によって南海トラフ巨大地震の想定震源域が拡大するのですか？

A1. 政府の地震調査研究推進本部では、南海トラフ想定震源域の北端は、深部低周波微動^{※1}の発生域を根拠として定めており、これより北側ではプレート境界型地震は発生しないと考えられています（「南海トラフの地震活動の長期評価（第二版）」地震調査研究推進本部）。そのため、今回の結果によって南海トラフの最大想定震源域の範囲が変更されることはないと考えています。

今回の解析結果で南海トラフ想定震源域の北側に“ひずみ”が生じているように見える領域は、内陸のブロック運動^{※2}の影響が大きい部分です。今回の解析では、フィリピン海プレートの沈み込みによって生じる“ひずみ”のみを対象とし、ブロック運動の影響を考慮していないため、あたかも“ひずみ”があるかのように表示されたものです。このことについては、論文の中でも言及しております。

※1 深部低周波微動

沈み込む海洋プレートと陸側プレートとの境界の深い領域で発生する継続時間の長い微弱な振動を「深部低周波微動」といいます。

※2 ブロック運動

プレートはいくつかのブロックに分かれて相互に回転したり移動したりしており、この動きを「ブロック運動」といいます。

Q2. 南海トラフ域で発生が懸念されている東海地震、東南海地震、南海地震の想定震源域やそれについての被害想定は変更されるのですか？

A2. 今回の解析結果によって、想定東海地震や昭和の東南海・南海地震の震源域の外側にも強い“ひずみ”があることが示されました。今後、今回の結果を基礎資料の一つとして、政府の地震調査委員会などで地震の評価や津波の規模などについてより詳しい議論が行われるのではないかと考えております。したがって、今回の解析結果をもって、直ちに上述の地震の想定震源域や被害想定に変更が生じることを意味するものではありませんが、今後の議論の結果によっては、想定震源域や被害想定が見直される可能性があります。

本件に関するお問い合わせ先

海上保安庁海洋情報部海洋防災調査室

Email:eisei[at]jodc.go.jp